江西にて[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　香山光郎

子と二人で、十畳の一を借りて、僧な生活をしてゐます。小生の近、まがひにて

三日月の皐月のを畦づたひ蛙のに導かれ行く[[2]](#footnote-2)

苗代の水汲む農夫の上る鷺立つ野邊の夕陽の赤さよ

なれば野邊の雲雀を夕さればなく鳥を裏山に聴く[[3]](#footnote-3)

なだらかに流るゝをえて行く風にはるゝの青

わがにかせまほしや靄ごもりあかつくの山鳥の[[4]](#footnote-4)

1. 1943年6月18日付『京城日報』 [↑](#footnote-ref-1)
2. 三日月のかかった五月の夕暮れ、田んぼの畔を蛙の声に導かれ歩いていくよ。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 昼は野原のひばり、暮れれば夜の鳥の声が裏山から聞こえてくる。 [↑](#footnote-ref-3)
4. あなたに聴かせてあげたいな。靄がかかった夕焼の森に鳴く山鳥の声を。 [↑](#footnote-ref-4)